

旬集  
大沢美智子  
旬日

*Junjitsu  
Osawa Michiko*

## 梨摘花生絹のやうな日暮来る

市川の北部の方には梨畑が多くある。桜より少し遅い時期に真っ白というよりは青白い花をつける。

梨農家では家族総出で梨の摘花作業が行われる。

その仕事は日暮れが来るまで続けられるが、梨花の白さに馴染んでしまうとまるで軽くて薄い紗にも似た日暮れを感じた。

(能村研三「序」より)

うちの娘でゐる旬日の雛かな

神輿舁く百の蹠のリズムもて

存分に濡れ荒神輿下さるる

祭 祢 纏 茶 房 の 客 も マ ス タ ー も

ゆ ふ か ぜ や 路 地 に 祭 の 触 れ 太 鼓

鳳 凰 の 啞 ふ る 初 穂 神 輿 練 る

ラ ム ネ 玉 か ら ん と 三 社 祭 果 つ

磴 駆 け て 双 手 は 翼 七 五 三

木 枯 や 縞 馬 は 縞 寄 せ 合 つ て

青天へ展ぐ家族図干蒲団

梨摘花生絹のやうな日暮来る

みなとみらい観覧車でふ夕端居

夜の秋明日ゆく山にルーペ置き

降臨の嶺々むらさきに夏明くる

八ヶ岳残照鷹高みつつ流れつつ

冬うらら鵜の濡れ羽めく能登瓦

名を入るる塗師の細筆能登しぐれ

遠八ヶ岳に雪形残り御柱祭

田に声や手送りにする早苗束

河鹿笛にはかに高し沿うて行く

星涼し板盛りの蕎麦波打つて

青葉木菟夜つぴで誰を待つ声か

禅僧の起ち居一晷緑さす

伊能図の山河頭ちたる淑気かな

太陽となるまで磨く冬林檎

祈りとは白一斉の幣辛夷

蓮咲いて水いつせいに力解く

いつの間に二重瞼やお年玉

学校に灯の入るまでを夕桜

天平の踏歌きこゆる揚妻雀

仰臥して歌書や俳書や緑さす

祭帯けんくわ結びの跳ねたがる

秋冷の子規の描きたる子規の貌

流金の鱭すきとほる夜の雪

立春や水青むまで菜を濯ぎ

皮剥かれ東風のひかりの杉丸太

くきやかに子の名の書かれ五月鯉

能村登四郎先生ご逝去

縹渺と梅雨のいかづち師の逝けり

夕されば吾に打つごとく水を打つ

短夜の海へつばさを白鳥座

能登二句

御陣乗太鼓身ぬちに響み明易し

蟬の声礁に落ちて能登金剛

藻の花の雨滴泳へしさゆれかな

着せ替へて白涼しかれ黄泉へ父

母訪はな片陰のまだ恋しき日

初風や御指欠けたる白鳳伝

秋澄めり山河アイヌの名を持ちて

鐘の音に霧また生まれ遭難碑

翼に日乗せて白鳥着水す

若水となる寸前の水の綺羅

著者略歴

大沢美智子（おおさわ・みちこ）

昭和15年11月 東京生まれ  
平成9年 林理に師事 作句開始  
平成10年 「沖」入会 能村研三に師事

---

句集 じゅんじつ 旬日

2018年7月30日 発行

定 価：本体2800円（税別）

著 者 大沢美智子

発行者 奥田 洋子

発行所 ほんあきや 本阿弥書店

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068(代) 振替 00100-5-164430

印刷・製本 三和印刷

---

ISBN 978-4-7768-1364-4 (3080) Printed in Japan

©Osawa Michiko 2018